

特別展 御即位30年記念「両陛下と文化交流—日本美を伝える—」

東京・上野の東京国立博物館で開催中、4月29日まで



「徳川末期明治初期にかけての典型的な職人」で、作品は「すべて職人的、仏師屋的で、又江戸的であった」と評したのは、長男の詩人・彫刻家で、「智恵子抄」で名高い高村光太郎。鍔金家になった三男の豊周は「ただ正直で律義で義理堅くて且つ非常な勤勉家であつた」として、「偉大な凡人」と呼んだ。

彼らの父、高村光雲のことである。なるほど独創的ではなかったかもしれないが、大きな時代の変わり目に立ち会い、自らの役割をまっとうした。それだけの器量があったと言える。

幕末の1852年、江戸の生まれ。ペリー来航前年にあたる。祖父が道楽が過ぎ、毒を盛られて苦しんだため、声を出す芸事は覚えるなと父に戒められ、下町の仏師の弟子になった。修業10年余でひとり立ちし、

高村光雲「養蚕天女」



高村光雲「養蚕天女」
大正13年(1924年) 幅22・2寸・高さ48・2寸 宮内庁三の丸尚蔵館 ※31日まで展示

伝統の上に「日本の彫刻」

明治新宮殿の装飾にかかわったあと転機が訪れる。

1889年、開校まもない東京美術学校(現・東京芸術大)に雇われた。その1週間後、カリスマ的な指導者だった岡倉天心から奈良見物を命じられる。古い仏像を西洋の彫刻に並ぶ古典と位置づけ、腕の確かな光雲に学ばせたのである。

翌90年には、初代帝室技芸員のひとりに抜擢された。

光雲自身、美術学校ができたことも、帝室技芸員の役割も、最初は知らなかったと回顧している。それでも天心の構想通りに、伝統の上に「日本の彫刻」を創出すべく、一心に彫りつづけた。皇居前の楠木正成の銅像では、制作の中心となった。重要文化財「老猿」など動物彫刻に取り組み、得意の仏像にしても、柔らかなポーズなどで彫刻らしい工夫を加えてみせた。

2体が出品される「養蚕天女」は、いずれも晩年の1924年、皇太子時代の昭和天皇のご成婚に際しての記念品。高さ48寸余りの1体は貴族院から献上された。もう1体は文武官一同



制作中の高村光雲。右側の像は「養蚕天女」とみられる

献上の御飾棚に置く「御飾品」のひとつという(4月2・29日に展示)。近代を通じ、宮中の養蚕を皇后さまが担ったことにちなむ像だが、養蚕神は女性の姿をとることが多い。光雲は天女のイメージを重ね、優美さと威厳を与えている。

皇室への深い敬意があったこともまちがいない。30歳代半ば、明治新宮殿で用いる鏡縁「葡萄に栗鼠」を依頼されたときは、鳥屋からリスを一匹買って動きを研究し、「斎戒沐浴をするというほどではなくとも身と心とを清浄にして早春の気持よい吉日」を選んで彫りはじめたという。

1934年死去。この像とみられる作品を、慈しむように彫る写真が残る。

(文化部長 前田恭二)